

# ベルリン大学神学部(1810-1945)の一断面

—1993年フンボルト大学神学部の合同が指向するものをめぐって—

高 森 昭

はじめに

1. 1810年創立期における課題
2. ベルリン大学神学部(1810-1945)の教授陣
3. 1993年フンボルト大学神学部の合同

おわりに

注

参考文献

はじめに

1993年6月に、戦後東西ベルリンに分かれていた、プロテスタント神学の教育研究施設が、フンボルト大学神学部として合同を実現し、同年秋より冬学期の授業を開始するに至った。この出来事は言うまでもなく、1990年の東西ドイツ統一がもたらした変革のひとつであるばかりでなく、ベルリンにおける大学の歴史においても記憶されてよい意味をもつものである。省みれば1810年ベルリン大学の創立以来、その神学部もまた波瀾に富む展開を経験してきた。1945年までのベルリン大学神学部、1946年以後の東ベルリンにおけるフンボルト大学神学部、そして同時に1945年以降の西ベルリンにおけるベルリン神学大学をへてのち、1993年、ベルリン大学ゆかりの場に再合同した神学部が、装いも新たに登場することになったのである。

こうした経過をへた歴史を大学史研究としてまとめるのは、現状では資料な

どの点から困難な問題が少なくない。恐らくは次の21世紀の始め、2010年にむかえるベルリン大学創立200周年記念の時まで、我々は待たねばならぬであろう。本論文の目的は、現在、利用し得る限りの資料によって、なお断片的であることを知りつつも可能な限りの範囲で、先ず第一段階としてベルリン大学神学部（1810-1945）の時期を取り上げるところから始めて、その結果を報告するに留めるほかはないと思うのである。したがって第二次大戦後の東西ベルリン分断期における神学研究教育の歴史については、次の機会を待つことにしたい。ただ1993年におけるフンボルト大学神学部における合同の実現については、筆者の知り得る限り詳細に述べることにする。このささやかな論文が、ベルリンにおける神学の高等教育研究施設、あるいは諸般の大学史研究に関心をもつ方々に、何等かの貢献となり得ることを、筆者は切に願ってやまない。

### 1. 1810年創立期における課題

ベルリンに新たに大学を設立する構想と計画は、プロイセンがナポレオンの進攻に敗北する中で、新人文主義や理想主義哲学にもとづく近代的教育改革の理念のもとに推進された。<sup>(1)</sup> 1807/8年当時、新設されるべき大学のプロジェクトが進められるなかで、ベルリンに集まってきた顔ぶれは、哲学者J. G. フィヒテ、神学者F. D. シュライエルマッハー、古典文学研究者F. A. ヴォルフなどを中心とする人たちであり、学問、研究、教育のあり方について白熱的な論議が継続されたのである。<sup>(2)</sup> こうした状況のなかに大学設立の計画を、プロイセンの全教育制度改革の一環として、実現するのに貢献したのは、申すまでもなくヴィルヘルム・フォン・フンボルトである。彼が新設された宗務公教育局長官としてこの仕事にあたったのは、1809年から翌10年にいたる16ヶ月の短期間であった。しかし、それまでの大学の組織構造を廃止することなく、新しき精神をもって改革し再建させた点において、フンボルトの名はその後のドイツ大学の形成・発展に、つねに伝えられることとなった。

いまフンボルトが実現をはかった構想の内容を述べることは、すでに多くの場所で語られているので避けておきたい。<sup>(3)</sup> ただ、ベルリンにおいては、総

合大学の名のもとにあらゆる学問を包括する施設を造り、一般教育は職業教育より優先されて然るべきであるとする基本命題は、フンボルトが設置した学術代表者委員会により支持されていた点は言及せねばならない。すなわち1810年2月に、フンボルトのもとに、諸学問分野の専門家を統合した高等教育および学術行政の審議機関としての委員会が設置せられ、構想の実現をめざし協力したのである。その初代委員長にあげられて活躍したのは、シュライエルマッハーであったことも、記憶されてよいと思われる。

かくして創立期のベルリン大学は、中世以来の伝統的な四学部から成っているが、いずれも当時における代表的な学者・研究者を擁する総合大学であった。医学部にはC. W. フーフェラント、J. Chr. ライルの両名が、法学部にはF. K. v. サヴィニーとK. Fr. アイヒホルンがいた。また文学部（哲学部）にはJ. G. フィヒテのほかFr. A. ヴォルフ、Ph. A. ベックがおり、神学部にはFr. シュライエルマッハーの姿があったのである。<sup>(4)</sup>

さてシュライエルマッハーは、1810年5月に神学部設立に関する意見書を提出している。この意見書は同年秋のベルリン大学創立と授業開始を前にして、神学部の理念、内容、組織などをまとめたものである。<sup>(5)</sup> シュライエルマッハーがこの意見書において述べている見解は、その基本線が創立期のベルリン大学神学部を実現されて行く結果を生んだばかりでなく、其後の神学部の歴史的形成のなかに、継続して影響を与え語り伝えられることになった。その主張点を今ここに、次の三つの項目に要約して紹介したいと思う。

先ず第一に、神学部の教会との関係についての見解が述べられる。これらは当時の思想史・教会史的状况の中で表われてきた、神学上の論議を背景にもつものである。すなわち新設されるベルリン大学神学部は、如何なる関係をプロテスタントおよびカトリック教会と持つべきであるかという問題である。ここでシュライエルマッハーは、神学部においては教派間の相違点を対立の視点からのみ把握することをしないとの立場を明確にしている。聖書学および教会史について、彼はそこに見られる相違点は問題とする必要はないと考えており、また教義学についてはカトリック、プロテスタント両教会における重要な諸信

条が解明される点を配慮すればよいとしている。この関連でシュライエルマッハーは、プロイセンにおけるルター派・改革派の合同（Union）教会運動に深く関わっていたことが、記憶されてよいであろう。教派的対立には力点を置かず、続く項目で述べる神学の研究教育施設としての内容を盛る構想が明確にされているのである。

第二には総合大学における神学部が保持すると共に、形成して行くべき内実についての見解である。それを三点に要約して述べて見たい。先ず第一点として強調されるのは、ベルリン大学創立に際しての基本理念の一つとなった、教える自由と学ぶ自由とから成る、学問的精神に立つ自由は制限されてはならないことである。教育と研究の場としての神学部のあり方がここで明確に打ち出されている。さらに第二点にはかかる性格をもつ神学部において、歴史と現実における精神的・宗教的諸権威との、活気ある対決がなされて然るべきであるとする抱負が述べられるのである。そして第三点としてシュライエルマッハーは、それらを通してキリスト教の本質が、統一されたまとまりのもとに組織的全体として把握されるために、神学のいとなみが形成されるべきことを力説している。この三点は互いに連結している事柄であり、それらが働きかけ合いつつ総合大学における神学部の理念が、形作られようとしていることを見るのである。

最後に第三には、シュライエルマッハーが、学識ある円熟した神学を目指しての、神学研修セミナーの設置を提唱していることがあげられる。その趣旨は、より個人的な交流を通じて神学のまなびと成長をとげるためであり、そのために実施されて然るべきものであると述べられる。そして神学部全体に関わることが最善であるとされるが、あくまでもこのセミナーは、大学のそれとは別個になされることが明白に主張されている。我々はここに後に種々の形態で表れることになった、教会立牧師研修所 Prediger-Seminar の初期の姿の一つを見ることが可能であろうか。いずれにしてもシュライエルマッハーは神学部設立にあたって、すでにこのような神学研修セミナーの構想をいだき、毎年二回、聖書解釈および教会史・教義学の各部門を主題にして開催することを提唱して

いるのは、注目されてよいと思われる。

## 2. ベルリン大学神学部（1810-1945）の教授陣

ベルリン大学神学部において、創立時に正教授として在職したのは、シュライエルマッハー、マルハイネッケ、デ・ヴェッテの三名であり、1813年にネアンダーが加わっている。この四名の教授たちの場合、当時の神学諸学科が後年のような厳密な専門別変成をとっておらず、むしろ二つ以上の分野を正教授がそれぞれに受持ち分担がなされていたことが、ひとつの特色となっている。この傾向は創立後、約30年にわたって続いており、これは19世紀初期の神学研究教育を同時代の学問全般の流れと関連して考える場合に、忘れてはならぬ視点となるものである。

あわせてベルリン大学神学部において次第に、専門領域として新約、旧約、教会史の区分がなされて行く経過が見られるのは、演習を行なうための研究室と付属図書室の設立が必要とされてきたことによるという事情によっている。これより少しおくれてはいるが、実践の研究室が1875年より、つづいて組織の研究室が1900年に設立されている。それらとは別に、キリスト教考古学への関心が強まってきた、1849年には当時としてはいち早く付属研究所が開設されていた。

こうした展開にともなって、神学部の正教授数が次第に増加していることが表われている。<sup>(7)</sup> すなわち創立時に正教授3名であったのが1813年に4名となり、以後、1829年に5名、1841年に6名に増加している。さらにこの傾向は1866年からは7名に、1877年からは9名となり、1883年以後は10名に達している。同時にこの時期には、助教授、私講師について、ここで具体的な数をあげることが断念せざるを得ないが、いちじるしい増加が見られることを指摘せねばならない。こうした教員数の増加と表裏の関係にあるのは、ベルリン大学の世界的な評価が高まっていく流れのなかに、神学部は歴史部門を中心とするいくつもの専門分野に著名な教授陣を持つに至った点であろう。こんにちその時期を、多くの人々によって1871年より1918年頃と設定されているのである。

いまここでその経過を詳細にえがくために、原則として正教授に限定してはいるが、専門領域ごとに、人名と在職年代とを表示することを試みたいと思う。<sup>(8)</sup>

*Altes Testament*

Wilhelm Martin Leberecht De Wette 1810-1819  
Ernst Wilhelm Hengstenberg 1828-1869  
Wilhelm Vatke, a.o.Prof. 1837-1882  
August Dillmann 1869-1894  
Hermann Gunkel 1894-1907    Wolf Wilhelm Graf Baudissin 1900-1926  
Hugo Greßmann 1907 (1921 Ord.Prof.) -1927  
Alfred Bertholet 1928-1936        Ernest Zellin 1921-1935  
Johannes Hempel 1937-1940 (1940-1945 従軍牧師)

*Neues Testament*

Friendrich Daniel Ernst Schleiermacher 1810-1834  
(Otto Pfleiderer 1875-1876)  
Bernhard Weiß 1876-1908  
Adolf Deißmann 1908-1937  
Johannes Behm 1935-1945

*Kirchengeschichte*

August Neander 1813-1850  
Justus Ludwig Jacobi 1847-1851  
Johann Karl Lehnhardt 1851-1858  
Karl Gottlob Semisch 1865-1888  
Adolf von Harnack 1888-1921        Karl Holl 1906-1926  
Leopold Zscharnack 1910-1921  
Carl Schmidt 1929-1936

Hans Lietzmann 1924-1942  
Erich Seeberg 1927-1945

*Allgemeine Religionsgeschichte*

Edvard Lehmann 1910-1913

*Systematische Theologie*

Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher 1810-1834  
Philipp Marheinecke 1810-1846  
August Twisten 1835-1876  
Karl Immanuel Nitzsch 1847-1862  
Isaak August Dorner 1862-1883    Otto Pfleiderer 1876-1908  
Julius Kaftan 1883-1921        Adolf Schlatter 1893-1898  
Artius Titius 1913-1933        Reinhold Seeberg 1898-1921  
Georg Wobbermin 1934-1937    Wilhelm Lütgert 1929-1935  
Friedrich Wilhelm Schmidt 1939-1945

*Praktische Theologie*

Paul Kleinert, Prof. f. AT. u. PT 1877-1907  
Friedrich Mahling 1907-1933  
Leonhard Fendt 1934-1951

*Missionswissenschaft*

Lulius Richter 1920-1930  
Johannes Witte 1930-1939

*Christliche Archäologie und kirchliche Kunst*

Ferdinand Piper, a.o.Prof. 1849-1890

Nicolaus Müller, a.o.Prof. 1890-1913  
Georg Stuhlfauth, a.o.Prof. 1913-1934

#### *Das Institutum Judaicum*

Hermann Lebrecht Strack, a.o.Prof. 1883-1922  
Hugo Greßmann 1923-1927  
Ernst Sellin 1927-1928  
Joachim Jeremias 1828-1829  
Alfred Bertholet 1929-1937  
Johannes Hempel 1937-1945

このような教授陣の一覧表は、おそらく様々に受け取られるであろう。多くの著名な教授を擁してした頃の陣容を懐古することもあるであろう。しかし、ここでベルリン大学神学部の一断面を見ることが、可能でありまた同時に、必要な判断ではないかと思われる。それは19世紀後半にベルリン大学神学部が教授数を増加させ、各部門の充実をはかって行く経過のなかで直面した問題にふれている。とくにベルリン大学神学部の場合、例をあげれば新約部門において、それが表面化しているからである。上記一覧表に出ているように、創立期にシュライエルマッハーが組織部門と重なる形でながく新約部門の講義を担当していた。其後に、新約学専門の教授をベルリン大学神学部が持つようになるのは、他部門に比較しておくれており、19世紀70年代になってからである。その背景として1828年から1869年にわたって在職した、ヘングステンベルクが正統主義神学の傾向を学部内に強化したため、この時期に新約学で教授資格を得た人の多くが、他大学へ移ってしまったことが指摘されている。

さらに新約学教授職を造ろうとするに際して、学部内には、ストラスプールのいたH. J. ホルツマンを推す派と、グライフスヴァルトにいたH. クレーマーの招聘を主張する派とが対立していた。そうした事情のためプロイセン内相ファルクは、O. プライデラーを迎えることを1875年ようやく決定したものの、

プライデラー自身は翌年、組織のトヴェステン死去のあとを受けて組織神学の講義を担当することとなり、新約の教授として最終的にB. ヴァイスが着任したのは1876年のことであった。<sup>(9)</sup>

新約固有の教授専任にあたって難儀する事情は、ベルリン大学神学部においては更に継続されている。すなわち1893年に、A. シュラッターがグライフスヴァルトから招聘されたが、この人事はそれに先立つ1888年に着任したA. v. ハルナックへの反対表明を意味していた。シュラッター自身も組織部門のひとりとして位置づけられ、新約の同僚である筈のヴァイスも、他方、シュラッターとは全く打ちけた態度を示さなかったという。それは1898年にシュラッターがチュービンゲン大学へ移っていく結果につながることになるのである。

いささか極端な事例をあげたが、新約部門に関して見るならば、ベルリン大学神学部で新約学の教授資格を得た少なからぬ人たちが、他の大学ないしは教会などほかの場所で仕事をする結果となり、加えて他大学から招聘する計画では、教授の人選に困難する事態を招いていることがみられるのである。ベルリン大学神学部の歴史における一断面として記憶されてよいものであろうと思う。

### 3. 1993年のフンボルト大学神学部の合同

冒頭にすでに述べているとおり、戦後東西ベルリンに分散を余儀なくされていた、プロテスタント神学の教育研究施設が合同したのは、1993年6月のことである。始めに、その時まで戦後ながきにわたって、東西ベルリンにおかれた四つの施設の名称と場所とを旧表示のままで、しるしておきたいと思う。

Berlin-Ost:

Sektion Theologie an der Humboldt-Universität, Charlottenstr. 42, Berlin, DDR-1080.

Sprachkonvikt der Evangelischen Kirche in Berlin-Brandenburg, Borsigstr.5, Berlin, DDR-1040.

Berlin-West:

Kirchliche Hochschule Berlin, Teltower Damm 120-122,  
1000 Berlin 37.

Institut für Evangelische Tehologie an der  
Freien Universität Berlin,  
Ihnestr.56, 1000 Berlin 33.

なお現在の名称と場所は以下のようなっているので、あわせて記しておく。

Humboldt-Universität zu Berlin

Theologische Fakultät

Dekanat Burgstr.25 10178 Berlin

Bibliothek Waisenstr.28 10179 Berlin.

ここに記した四者に関して、ごく簡略に説明を加えたいと思う。

1946年にそれまでのベルリン大学が、フンボルト大学として再開された時に、神学部もそこに残されることになった。その当時から近隣のベルリン大聖堂内に、図書館、研究室などの施設をもち使用していた。そして1971年から、神学セクションとして存続したものである。

次の Sprachkonvikt は、その歴史を30年代半ばすぎに教会立神学大学の一部として創立されたことに由来する。その名称は初期に古典語学習の施設として存続したところにさかのぼる。そして1945年に再開され、1961年以後は、東ベルリンのベルリン・ブランデンブルグ教区神学教育機関として維持された。1993年のフンボルト大学の合同に先立って、1991年には当時のフンボルト大学神学部との合同を実現していたのである。

西ベルリンにあった Kirchliche Hochschule Berlin ベルリン神学大学は、その歴史は30年代半ばに告白教会の牧師養成機関として創立されたことにさかのぼる。そして1945年11月に再開され、西ベルリンの西南端ツェーレンドルフにある神学大学は、1961年まではベルリン・ブランデンブルグ教区 (まだ東西

の分離はなかった)が設立した、東西ドイツに開かれた神学研究教育機関であった。学位授与権をもち、国家から認可された学問的水準をもつ大学に数えられていた。

自由大学は1848年に西ベルリンに創立された大学であり、その哲学および社会科学部Ⅱには1956年以降、プロテスタント神学の講座が設けられた。ただし、ここでは専任の教授はごく僅かであり、このたびの合同に参加した様子はなく、自由大学に残っている模様である。

さて合同によって新たに成立した、フンボルト大学神学部は、1993年より1994年にかけての最初の冬学期に、23名の正教授を中心に授業を開始した。その内訳は旧西ベルリンの神学大学から12名、旧東ベルリンのフンボルト大学神学部から11名となっている。その顔ぶれを以下のように、部門別に整理して表示して見たい。ちなみに氏名の後に (W) および (O) とあるのは、それぞれ西ベルリンの神学大学、東ベルリンのフンボルト大学神学部からの参加者であることを示すものである。

93/94WS

旧約	M.Köckert(O), R.Liwak(W), P.Welten(W)
新約	G.Baumbach(O), H.-G.Bethe(O), C.Breytenbach(W), P. Von der Osten-Sacken(W), H.-M.Schenke(O), C.Wolf(O)
歴史	H.-D.Döpman(O), K.-V.Selge(W), U.Wickert(W)
組織	C.Gestrich(W), R.Kramer(W), W.Krötke(O), J.Wirsching(W)
実践	P.C.Bloth(W), J.Henkys(O), K.-P.Jörns(W)

エキュメニズム 宗教学・宣教学 H.Balz(W), K.-W.Tröger(O)

考古学および美術 G.Strohmaier-Wiederanders(O)

哲学 R.Schröder(O)

なお、その後の消息を知り得たかぎりで書き加えておきたい。1994年夏学期の終りには、歴史のデップマン、新約のパウムバッハおよびシェンケの三名が停年となった。また1995年には、東方教会関連の教会教派学、古代キリスト教史および実践の三教授職が、公募選任される手筈になって準備が進められていた。そのうち実践部門の教授は1995/96年冬学期に、ミュンスターの M. Meyer-Blank が就任することが決定したのが確認された。あわせて古代キリスト教史の教授は、エアランゲンにいる私講師 H. Ohme に招聘がなされたことは公表されたが、諾否についてはなお不明なままである。<sup>(10)</sup>

それはさておき、従来からのフンボルト大学神学部とベルリン神学大学との合同が実現し、フンボルト大学のあるベルリン中心部に、神学研究教育機関を集中するのは、少なからぬ作業を要求するプロジェクトに外ならないのである事実、合同が正式に決定されたのは1993年6月であり、すべての移転が完了したのは1994年夏であった。ツェーレンドルフからの図書館、研究所などすべての移転、ベルリン大聖堂内の図書館の閉鎖と合併、あわせてフンボルト大学本館ほか数ヶ所に分散した教室の問題、850名前後に増加した登録学生など、過渡期の一時的混乱が最初の1～2学期間に見られたように思う。

あわせてベルリンには東西分断にともなう独特の状況が、学術、文化などの各種施設について、これまで避けられなかった。すなわち、大学のほかに、国立図書館、学術アカデミー、芸術アカデミーなど、いずれも、東西ベルリンに併立されてきたのである。それらの膨大な資料と組織が、文字通り一体化されるには、なお、しばらくの時が必要かと思われる。しかし、二つの国立図書館が合同を実現させたことのほかに、旧東ドイツの学術アカデミーは、ベルリン・ブランデンブルグ学術アカデミーとして改組され、東西ベルリンの学術アカデミーが一体化されている。これまで西ベルリンの神学大学付属であった、シュライエルマッハー研究所は、1994年にベルリン・ブランデンブルグ学術アカデミーの付属研究所となり、同年秋にベルリン中心部にある旧東ドイツ学術アカデミーの建物に移転を完了したことは、報告しておきたいと思う。

現在、統一後のベルリンには、フンボルト大学、自由大学、理工科大学と三

つの大きな大学が存在する。それらの間の合同は、種々の問題のため急には進行する模様ではないが、そのなかにあつて、プロテスタント神学に関する限り、かつてのベルリン大学ゆかりの場所に、神学部が新たに合同して造られたことは、大学史のうえでも歴史的な出来事と言ってよいであろうと思われる。

## おわりに

我々はベルリン大学神学部における、創立期の問題から始めて1945年に至る展開を概観してきた。そして東西分断の時期が終った1993年のフンボルト大学神学部の合同にふれて、その現況を報告した。このような歴史の展開を通して筆者が感じている事柄を、終りにあたり簡単に述べて見たいと思う。

ベルリン大学はその創立に際して、改革された近代的大学として出発したが、あわせてベルリンにおける特別な事情を無視することはなかった。すなわち総合大学や学術アカデミー、また他の学問にかかわる諸施設は、ベルリンにおいては統一された全体を構成することが強調されたのである。事実、1810年の創立にあつて、将来、学則が制定されるまで設けられた、「予備的規則 §. 1」には「……当地にすでに存在している科学アカデミーおよび芸術アカデミーの両者、さらに学術的な研究所と博物館と関連をもち、それらと共に有機的全体組織を構成する」と述べられていた。<sup>(11)</sup>

このことは、ベルリンにおける事情に由来するとはいえ、其後の高等研究教育施設の問題に関連して、大学と教会と国家との三者が入り組んだ複雑な関わりを保持することを、避けられないものにした点は、記憶されて然るべきであろう。

これに関連して筆者は、第二次大戦直後に西ベルリンにおける神学大学が設立されるに際して、その性格づけをめぐる論議や対決がなされていたことを、想起せざるを得ないものである。その場合の争点は、すでに30年代にさかのぼる背景を持つものであったが、ベルリンにおける神学研究教育機関は国立である大学神学部統合すべきであるとする構想と、この同じ課題は教会立の神学大学において学術アカデミー（教会立）を指向する方向で実現すべきであると

する構想との間になされたものであった。<sup>(12)</sup> しかしながら、当時は東西ベルリン分断の状況下に、いずれも実現化せずに終わったのである。こうした争点1体が1993年のフンボルト大学神学部における合同以後、再びあらたなる課題として浮かび上がる可能性が全くないと見なすことは、その歴史的状況から考へても早計であると思われる。

【注】

- (1) 以下の段落に関して、レティティア・ベーム、『ドイツ大学の勃興と改革』（明治大学国際交流基金事業招請外国人研究者講談録No.7）、1887年、明治大学国際交流センター刊行、に収録された文章を参照していることを、感謝をもって申し添えたい。
- (2) 一連の討議全体に関しては、末尾にある参考文献にそれぞれ収録されており、参照していただければ幸いである。ただしその中で、次の文庫版は資料集として貴重な存在であるので、とくにここで指摘しておきたい。  
Gelegentliche Gedanktn über Universitäten, von J.J.Engel, J. B.Erhard, F.A.Wolf, J.G.Fichte, F.D.E.Schleiermacher, K.F. Savigny, W.v.Humboldt, G.F.W.Hegel, (Reclam-Bibliothek Band 1353), Leipzig, 1990.
- (3) この点については注(1)にあげたレイティティア・ベームの講演録、31頁-34頁に七項目にわたって要約されている。
- (4) ステファン・ディルサー、池端訳、大学史（下）、東洋館出版社、1988年、276頁-293頁、とくに284頁-286頁参照。
- (5) その全文は、こんにち次の資料集に収録されている。R.Köpke, Die Gründurg der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, 1860, S. 211-214を参照して頂きたい。なお次の叙述は参考になるので留意して頂きたい。  
W.Elliger, 150 Jahre Theologische Fakultät Berlin. Eine Darstellung ihrer Geschichte von 1810 bis 1960 als Beitrag zu ihrem Jubiläum, Berlin, 1960, S.6-8.  
(なお末尾におかれた付表 Lehrkörper der Theologischen Fakultät Berlin は貴重なものである)
- (6) この点については、次の個所に見られる叙述が参考になる。末尾にあげられた参考文献とあわせて参照して頂きたい。

Art. Berlin, *Universität*, 2. Theologische Fakultät, RGG Bd.1.



(1957) sp.1058-1060 (K.Kupisch).

- (7) これについては、M.Lenz, Geschichte der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, Bd.3, Halle, 1910, S.490-492  
Übersicht der Zahl der Lehrer にある1810年より1910年までの神学部  
の欄を参照している。
- (8) この表を作製するにあたり、末尾にあげた参考文献のほかに、次の論文集  
のなかの当該箇所を参照して材料としたことを申し添える。  
450 Jahre Evangelische Theologie in Berlin, hrg. von G.Besier  
& C.Gestrich, Göttingen, 1989.
- (9) この問題について次の叙述が参考になる。  
cf. H.Fink et al., Beiträge zur Geschichte der Theologische  
Fakultät Berlins. Zum 175 Jahrestag der Gründung der Berliner  
Universität, in: Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt  
Universität zu Berlin, Gesellschafts- und Sprachwissenschaft  
liche Reihe 34(1985), S.517-628, bes. 539-543 (J.Rohde, Die  
Geschichte der Berliner Lehrstuhl für Neues Testament).
- (10) これについては、Theologische Literaturzeitung 121 (1996), Sp.794  
および Sp.798 の報告を参照している。
- (11) これについては、高森 昭、ベルリン大学における学則制定とシュライ  
ルマッハー、神学研究 第43号、1996年、103頁-117頁を参照して頂き  
たい。とくに109頁-117頁にある「ベルリン大学のための予備的規則」(1  
810年)は重要な資料として記憶されて良いと思われる。
- (12) この点に関する消息については、次の叙述が参考になる。G.Besier, Die  
Gründung der Kirchlichen Hochschule Berlin 1935/45 und ihre  
„Väter“, in: Berlinische Lebensbilder, Bd.3, Berlin, 1987, S.325  
-336.

【参考文献】

- R.Köpke, Die Gründung der königlichen Friedrich-Wilhelms-Univer-  
sität zu Berlin, Berlin, 1860.
- Die Königliche Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin.  
Systematische Zusammenstellung der für dieselbe bestehenden  
gesetzlichen, statuarischen & regelmentarischen Bestimmungen,  
bearbeitet von P.Daude, Berlin, 1887.
- M.Lenz, Geschichte der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität  
zu Berlin, 4 Bde., Halle, 1910.
- Idee und Wirklichkeit einer Universität. Dokument zur Geschichte der  
Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, hrg. von W.Weischedel,  
Berlin (West), 1960.
- W.Elliger, 150 Jahre Theologische Fakultät Berlin. Eine Darstellung  
ihrer Geschichte von 1810 bis 1960 als Beitrag zu ihrem Jubiläum,  
Berlin (West), 1960.
- Humboldt-Universität zu Berlin, Dokument 1810-1985, Berlin (Ost),  
1985.
- H.Fink et al., Beiträge zur Geschichte der Theologischen Fakultät  
Berlins. Zum 175 Jahrestag der Gründung der Berliner Universität,  
in: Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität zu  
Berlin, Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe 34 (1985),  
S.517-628
- Gelegentliche Gedanken über Universitäten von Johann Jakob Engel,  
Johann Benjamin Erhard, Friedrich August Wolf, Johann Gottlieb  
Fichte, Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, Karl Friedrich  
Savigny, Wilhelm von Humboldt, Georg Friedrich Wilhelm Hegel,  
(Reklam-Bibliothek Band 1353), Leipzig, 1990.
- レイティア・ベーム、ドイツ大学の勃興と改革、(明治大学国際交流基金事業

招請外国人研究者講演録No.7）、1887年、明治大学国際交流センター。  
ステファン・ディルサー、大学史（上）（下）、池端訳、東洋館出版社、1888  
年。

## エキュメニカル運動における聖餐論

— 第二回信仰職制世界会議（エディンバラ 1937年） —

神 田 健 次

### はじめに

本稿は、エキュメニカルな信仰職制運動の歴史、とりわけ1937年のエディンバラにおける第二回信仰職制世界会議における聖餐理解を批判的に考察しようとするものである。<sup>(1)</sup> エディンバラ世界会議以前に、信仰職制運動史においては、ローザンヌ（1927年）において、第一回の信仰職制世界会議が開催されている。

世界会議においては、その当初からさまざまな重要な信仰職制の事柄が論議されてきたが、聖餐の問題は、その中でも最も重要な主題の一つであったと言える。この問題は、エキュメニカル運動全体における中核的問題といっても、過言ではないであろう。本稿の基本的意図は、この主題を宣教論の視点から考察しようとする点にあるが、まさにこの点で、アジアと日本の教会から貢献があったと言えるのである。

エキュメニカルな聖餐論をめぐる多くの研究があるが、なかんずく、G. K. シェーファー<sup>(2)</sup>とP. Ch. イベブイケ<sup>(3)</sup>の研究は、われわれにとって重要である。前者の主要な関心は、主題をめぐるヨーロッパの伝統的論議であるのに対して、後者ではカトリックの立場に依拠した関心が支配的である。がしかしながら、両者に決定的に欠けている点は、主題の宣教論的な問題設定にはかならない。これまで、日本の教会を含むアジアの教会からのみならず、欧米の神学者からも、聖餐の問題を宣教論の観点から考察する先駆的な貢献があったにも拘らず、ほとんど研究史的に顧みられることはなかった。<sup>(4)</sup> このよう